

由布姫の哀歡を想う

戦国乱世の中、凛と気高く生きた諏訪氏の姫君。薄幸の美女、由布姫の生涯と諏訪家をたどってみる。

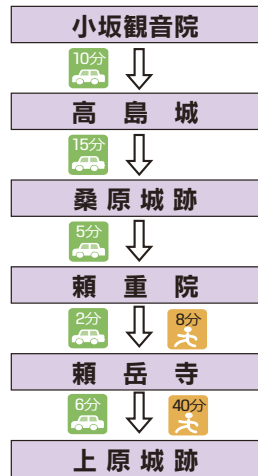
みんな死んで行く。せめてわたし一人は生きていたい。自害を拒む美しい少女。時に由布姫十五才。そのほとぼしる烈しさは、一瞬にして山本勘助の心をとらえる。戦渦広がる高島城、諏訪家滅亡のその最中。武田軍・天才軍師と諏訪家の姫君、二人が巡り会ったのは、運命か否か一。

平成十九年、NHK大河ドラマ「風林火山」。諸国を遍歴し、軍略に長けた伝説的軍師・山本勘助が、生涯の主君として武田信玄に仕え、ともに天下統一を目指して活躍した井上靖原作の傑作時代劇である。信玄の信濃攻略、諏訪攻めにおいて、勘助は自ら謀殺を企てた信濃の豪族、諏訪頼重の娘・由布姫と出会い、その気高さ、美しさに心奪われる。やがて武田軍に滅ぼされる諏訪家。仇敵・信玄の側室に迎えられ、一子勝頼をもうける由布姫。勘助は信玄を助け、由布姫を支え、勝頼を命がけで守り抜くことを誓うのだった。そしてついに、宿敵・上杉謙信と、川中島の合戦を迎えることに一。

信州諏訪は、由布姫生誕の地であり、小説に度々登場する主要な舞台である。信玄に、勘助に愛された由布姫とは、諏訪家とは一。あれこれと思いを馳せつつ、ゆかりの地を巡ってみることにした。

岡谷市小坂地区の諏訪湖を望む高台、静寂の中に佇む小坂観音院。ここは、小説上由布姫が二五才で夭折するまでの短い生涯を過ごした場所である。由布姫は信玄の側室として甲斐に迎えられたが、勝頼誕生後に政略的配慮から諏訪へと戻され、ここを居館としたと描かれている。由布姫を訪ねて、勘助、信玄も足繁く通ったとされる。

境内の奥には、由布姫の供養塔がひっそりと祀られている。石塔に祈りを捧げたあと、眼下の諏訪湖を見つめてみる。ゆるやかに寄せて



樹齢七百年以上を数えるサワラの大木が連なる参道は厳かな雰囲気漂う。遠く高島城に相対するかのような正門から境内へ。



小坂観音院はあじさいの名所として親しまれる。眼下の諏訪湖、観音院沖には信玄が自らの遺言により葬られたという。最愛の由布姫を見守っているのか。



木々に守られるようにして建つ由布姫の供養塔。昭和三八年に由布姫の悲哀を悼み建立された。傍らに原作者・井上靖の参詣記念植樹の碑。



は返す波。父を討った仇に愛され甲斐の地へ。その男の子を生みながら再び諏訪の地に戻される。激動する運命の中、彼女の胸に去来したものは何だったのか。愛か、憎しみか、それとも一。かつて由布姫も見つめたであろうその風景に彼女の想いが見える気がして、じっと目をこらした。

小坂観音院から高島城へ。原作で諏訪氏の居城とされる高島城は、その時期には茶臼山にあった山城で、現在の城は豊臣秀吉の家臣・日根野高吉が築城した。かつて諏訪湖の波が城際まで迫り、別名「諏訪の浮城」と呼ばれた要塞。現在の天守閣は昭和四五年に復元された。

もともと諏訪家と武田家は姻戚関係にあった。頼重の正室・禰々御料人は、信玄の妹である。だが、信濃攻略の拠点とするべく、信玄は突如として挙兵する。その際、頼重は本拠である上原城から支城の桑原城へと逃れ、そこで捕らえられたのだ。

城内に入り、美しい庭園の西側、石段を上り天守閣に入場。一階、二階は資料室。三階は展望室になっている。その西側からは諏訪湖や南アルプスが見事である。東側の遠く向こうには、悲劇の城主、頼重が降伏した桑原城跡、上原城跡のある山々が連なっていた。

国道二十号を茅野方面へと向かう。道沿いに並ぶ造り酒屋を眺めながら、やがて桑原城跡入口に到着。深閑とした山道をしばし上ると、本丸跡に辿り着く。今は草原となった跡地。捕らえられ、甲斐の東光寺に幽閉後、この世を去った頼重。義兄である信玄に討たれる無念さを想う時、やり切れなさに胸が痛む。せめてその霊をなぐさめるべく、頼重が弔われているという頼重院へ立ち寄ることにした。

本人の名を冠した寺院の本堂脇には霊を弔う石塔、本堂には頼重のものと伝えられる供養塔がある。どうか安らかに、と、そっと手を合わせた。

その頼重院から旧甲州街道を五分ほど歩く



高島城へは小坂観音院から湖畔を諏訪市方面へ車で約10分。駐車場から天守閣を見上げつつ、お堀沿いから冠木橋を通り城内へ。桜や藤の名所としても有名。



城内の資料室には諏訪家ゆかりの品々が並ぶ。家紋の梶葉紋は諏訪明神を象徴する紋所として使用。



天守閣の三階から桑原城跡の方角を望む。お堀を泳ぐ鴨や白鳥の愛らしい姿も楽しめる。

【高島城】

- 休館日／年末年始、11月第2木曜日
- 開館時間／9:00～17:30(10/1～3/31は16:30まで)
- 入場料／大人300円、小人150円
- お問い合わせ／0266-53-1173



桑原城跡／上原城の支城であり、猛者たちが儂く散った夢の跡地。裏切りも哀切もすべて飲み込んで、今はただ、静かに時が流れるのみ。春には可憐なカタクリが咲き乱れる。

と、諏訪家を復興した頼忠(頼重の従弟)の子でのちの高島藩初代藩主・諏訪頼水が開基した諏訪家の菩提寺、頼岳寺がある。立川流の彫刻が施された本堂は当時の諏訪一族の勢力がうかがえる重厚な造りである。

細くうねる坂道を進み山へと登っていく。上原城諏訪氏館跡の石碑を過ぎ、やがて標高978mの上原城跡に到着。静かな山道を行くと、まもなく金比羅神社がある三の郭に到着。この上が、物見岩という巨岩がある二の郭であり、その数メートル上が主郭である。眼下に広がる諏訪盆地。在りし日の頼重は、この風景を眺めながら何を思ったのだろうか。彼方の山裾には、諏訪家が大祝を務め、信玄にも篤く信仰されたという、諏訪大社が見えていた。



上原城跡二の郭に残る物見岩は間近に立つとその大きさに圧倒される。代々諏訪惣領家の居城であり、頼重もここを本拠としていた。



頼重院には頼重の首が祀られているといわれ(写真右)、胴体は山梨県の東光寺にある頼重の墓に祀られているという。首を祀る際、彼の怨念により七つに割れたという巨石は、苔むし、粉々に砕け何とも荒々しい。何かしら底冷えのする思いである(写真左)。



頼岳寺の境内奥に建つ諏訪氏頼岳寺御廟所。三室に分かれ、左から頼水、父頼忠、母理昌院の霊が眠る。参道には樹齢約三百年の杉並木。



頼岳寺では寺紋に諏訪家や諏訪大社と同じ梶の葉が使われている。山門から白砂利が敷きつめられた境内に行くと正面に本堂がある。



諏訪惣領家の屋敷跡。信玄に滅ぼされた後、武田の重臣・板垣信方が諏訪郡代として置かれたため、通称板垣平と呼ばれる。武田氏の諏訪統治の拠点。

